

- [要約](#)
- [ロリータという単語](#)
- [ロリ「ィ」タとは何か](#)
- [ロリータファッションの特徴](#)
- [ロリータの分類](#)
- [ロリータのルーツ](#)
- [ロリータというひと](#)
- [ゴシックロリータとロリィタの関係](#)
- [ロリィタと姫系の関係](#)
- [ロリィタとメイド・コスプレの悩み](#)
- [一般人とロリィタの確執](#)
- [ロリィタがよく好むもの一覧](#)

## 要約

[\[部分編集\]](#)

ロリータはナボコフのロリータに由来して少女という意味を持つ言葉である。そのロリータの名前を冠するこの服装は本人達ですら、過剰な少女趣味と認める程のラブリーさや少女らしい純粹さを付属させている。普通フリルやレースや大量に使用され、高級感のある生地で表現される。一般的にはドレスやコスプレ衣装のような物がイメージされるが、カジュアルウェア、部屋着、ルームウェア、水着などもロリータファッションの一部とされる。

[ページTOP](#)

## ロリータという単語

[\[部分編集\]](#)

「**ロリータ**」とは、ナボコフの小説ロリータに由来して「少女」そのものや「少女的な特長」を指して使う単語である。

小説ロリータの作中で「ロリータ」は、少女でありながら大人の魅力を放つコケティッシュな少女として描かれているが、日本ではその意味が逆転して大人の女性が少女や幼い子供のような魅力を持つ事を「ロリータ」と呼んでいる。「ロリータファッション」もその一例である。

(単語としてのロリータの意味は詳しくは辞書のロリータの項を参照。 [ロリータ](#))

「ロリータファッション」は日本で発祥したファッションであり、現代日本で見られる子供服や西洋で現れ始めた頃の子供服(不思議の国のアリスの主人公が着ている様なもの)がモチーフとなっているというのが一般的だが、17~18世紀のロココ時代やイギリスのヴィクトリアンファッションも大きな影響を与えている。また日本の戦後に活躍した中原純一、その後を継ぐ内藤ルネらの提案したファッションも外見的な類似点が多く、[BABY,THE STARS SHINE BRIGHT](#)がイベントで公開したアトリエの資料として含まれていた事から影響を与えていたと考えられる。

また日本の70年代頃にはクリスチャンディオールの影響下で少女チックでは無いものの、パニエを入れたようなラインや、レースやフリル使いがロリータとよく似たクラシックファッションなる1920~1930年代風の服が一般の大人の女性服として着られており、流行していた。膝上丈の膨らんだスカートは現代でもロリータのカリスマ的ブランドであるVivienne Westwoodが発表したミニクリニに由来しロリータに好まれる靴のデザインはVivienne Westwoodのロッキンホースバレリーナが影響を与

えている。

つまりロリータ服の基礎的なデザインは西洋の国々や一つの時代に限らず

様々な時代から引用しているといえる。

映画「下妻物語」の影響で、ロリータ=ロココというイメージをメディアが  
先導となって定着させ、ロココをコンセプトに掲げる専門ブランドやシリーズも  
少なくは無いが、ロリィタ自体は単純にロココ時代の模倣と言える訳ではない様だ。

ロリータは1980年代から大人や、そろそろ子供ではなくなってくる年齢の女性  
(ハイティーン)がそのような服装をするというコンセプトのファッション、  
「大人のための少女服」であると定義付けられていたが、その一方でロリィタという  
名称が定着して若年層が着るのをよく目にされるようになってからは「ロリィタは  
20位までなら許せるが、流石にそれを超えて着るのは好ましくない」という考えが  
世間一般で根強くなり、元々ロリータは子供服と誤解される事が多かったが  
現在では一般層や一部のロリィタの愛好家にとっては中学生~22歳くらいの  
「年若い」女性のためのファッションと考えられている。

ロリィタブランドの中にはJuliette et JustineやEXCENTRIQUEの様に成熟した  
大人の女性をメインターゲットにしたブランドも少なくは無いが、  
ロリィタブランドの中でも特に有名なブランドの殆どはティーンを対象としており、  
ロリィタ全体で見ると実際にその幅の年齢のロリィタ愛好家が多いという事も  
世論に影響していると思われる。  
雑誌アリスアラモードの調査では現在のロリータファッション世代は大学生が多く、  
平均年齢は18,9歳であるという統計がある。

過去に遡るとロリータブランドは元々現在より高額であり、ある程度生活に余裕が  
ある大人か富裕層の子供がメインの購買層であった。  
そのためロリータは当時のティーンにとっては着るというよりも憧れの存在でもあった。  
現在でも全体的な対象年齢が大きく下げられたとはいえ、  
まだ(平均的な)10代の感覚にしてみれば非常に高額な商品である。  
しかしTVでロリータファッションの存在を知る機会も昔より多いとあって、  
まだ実際に少女の年齢であるにも関わらず、少女をイメージしたロリィタ  
ファッションに触発され憧れを抱く、その様な服を欲しがることが珍しくなくなった。  
ファッションをテーマにした小学生向けのファンシーグッズに甘ロリや  
ゴスロリが採用されたり、雑誌「gothic&lolita bible」において度々  
「大人ではないのでロリ服まだ沢山は買えないけどロリィタを頑張っています」  
「中学生がロリィタを着るのは変(生意気)でしょうか?」といった様な意見が  
投稿される事が多い。

当の子ども達(ローティーン)から見ればロリィタは本来自分たちが着るには  
早すぎる服であり、ロリィタファッションはまだ社会的な自由が制限されている  
ローティーンが抱く年長者への憧れの対象の、モデルの一つと認識している。  
それは幻想的なイメージの意匠への憧れや少女趣味嗜好といったものよりも  
憧れの原宿にいつでも遊びに行けて親に与えられたものではなく自分の好きな物を  
自分の経済力を持って身に付ける「自由に可愛いファッションを楽しむ大人」という  
もっとリアリティのある理想像である。(この場合の「大人」像はハイティーンも含む)  
その憧れの対象には世間の偏見や差別に屈しない強さといった側面も含まれる事もある。  
大人が少女趣味に走りロリィタを身につける一方で、逆にそういった大人に憧れて  
ロリィタになる少女が多いという逆転現象が発生しているのが現状である。

しかし大人たちにとっては依然ロリィタは子供や若者が好むものであり、それを好む  
大人たちを「大人になりきれない大人」として見つめている者が多いのが現状である。  
ロリィタはその外見やステレオイメージから社会的責任を感じさせないからである。  
その一方で実際に子供である年齢の年少者がロリータに興味を持つことは  
「子供らしい」というより「子供っぽい」と大人から特殊扱いをされる事が多い。  
それはほとんどの少女達が「大人らしさ」を追い求める時代にあっては、  
少女が少女趣味的な物を求めること自体が、現代では自然な事ではなく  
「乙女」等とカテゴライズされる特殊な価値観であると言えるのだろう。

そして特殊な趣味であるというイメージと他の少女たちと足並みを揃えられない事に親としては不安を感じる事から、ロリィタを「禁止」されるケースも少なくない。

しかし近年ではティーン雑誌で紹介されたり、前述の様に子供が使う玩具やグッズにロリィタの意匠が採用される等で子供たちの間では当たり前存在になりつつある。子ども自身の説得や目にする機会が多くなった事から「自己責任」や「制限」を設けることで許可する親や買い与える親も増えてきたようだ。ただしメイクやヘアアレンジに掛かる費用や技術、服のサイズの問題などローティーンがロリィタを着こなすのが難しいという問題は依然としてあり、それはそれぞれが自分の出来る範囲で工夫出来るかに掛かっている。

「ロリータ」というファッション用語ができたのは、大人が子供（少女）の服装をするというスタイルがブームになった時からと言われている。（しかし1990年代に流行した「子どもスタイル」はフリルやレースとは無縁な印象。またそれ以前から少女服・ロリータルックはあったとする記録もある。）現在で言うロリータスタイルとは違い、当時の子供の服装「そのもの」だった。当時は男性バージョンのロリータもあり、これは現在の異性装（または異性装に近い中性的な格好）のロリータとは異なり、男の子用の子供服（のような服）を男性が着るスタイルを指した。またこういう男性はフェミ男、フェミ男君と呼ばれていた。また、語源については1980年代前半のアイドル全盛期の少女タレントのファッションがストリートファッションに流れ、それを10代の若い女性ファンが真似て始めたのが少女ルックであると考える者が1995年代に存在した。その為「少女性を強調したアイドルの格好だからロリータ」と命名された可能性もある。また、ルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」との関連性から「不思議の国のアリス」と関係のある言葉であるナボコフの「ロリータ」と名づけられた可能性もある。ナボコフは不思議の国のアリスのロシア語版を訳したことがある。

ロリータ服は古風な言い方ではあるが現在でも時に少女服とも呼ばれ、ロリータファッションを

「少女的な服装」と表現される場合もしばしばある。それはロリータにとっては様々ある表現の中でも望ましい表現の仕方であったが、[コスプレ](#)などが世間で話題になり、それ以降コスプレや「コスプレ風ファッション」（ファッションとコスプレはまたベクトルが違う為、言葉自体がおかしい部分もあるが）と呼ばれるようになっていった。これは元々ロリータを愛好していた人々には受け入れがたい傾向である。

また、ジャンルとしてはあまり関係が無いのにも関わらず頻繁にメイドやメイド・コスチューム(とも混同されている。

(後述)

[ページTOP](#)

## ロリ「ィ」タとは何か

[[部分編集](#)]

[ロリータ](#)は[ロリィタ](#)とも表記するが、これはロリータで検索をかけるといわゆる「ロリコン」向けのアダルトサイトが多く出てくるため、ファッションに関してはロリィタと表記して区別するようになったといわれている。発生についてははっきりとせず、元々この名前だった（ロリータが後）という説やロリィタブランド[メタモルフォーゼ](#)の販売員が使い始めたという説などがある。但し少女的なものをロリータと表現する風習は1980年代後半から存在し、ロリィタという表記が目立つのは最近の事である為前者の正確性については不明である。

また、ロリータの語源はロリータ・コンプレックス（ロリコン）であると誤解されやすいが、ロリータファッションはロリコンからではなく、ナボコフの小説「ロリータ」から引用している(ただし誰が引用し、つけたのかは前述の様に不明である。)

ロリコンという言葉が誕生する以前からロリータという言葉は（ナボコフのロリータが発刊された当時から）数多くのメディアで「少女」を意味する言葉として使用されているため二つの間に「語源が同じである」という事以外の関連性は無い。

この二つが混同されやすい現象に対して、ロリコンという言葉が登場した時代（1970年代後半）と、ロリータファッションがロリータと呼ばれるようになるまで（恐らくは1970年から一部メディアに取り上げられた1987年のどこか）には大分間があると主張する者もいる。もし1970年代前半にロリータファッションが発祥していた場合は（現在の意味での）ロリコンという言葉よりも前にロリータファッションの語が誕生していたことになるが、当時の資料が乏しいため現状では不明である。

また、かつては「ロリㇿタ」と表記する者も居たが、最近では少なくなっている。これは自称「乙女のカリスマ」嶽本野ばらの著書、「ロリㇿタ」から来ている。この表記の衰退については1990年代後半にはちらほらと見られた旧字体を愛用するゴシックロリータ愛好者自体が激減したためとも思われる。熱心な嶽本野ばらファンの中には現在でもこの表記を好む男女も存在する。変換するとㇿはイで出すことが出来るが、厳密には「ㇿ」は「ウィ」と読むため「ロリータ」や「ロリイタ」と読むことは出来ない。

[ページTOP](#)

## ロリータファッションの特徴

[\[部分編集\]](#)

[レース](#)や[フリル](#)を多用したデザインと[パニエ](#)などで膨らませたスカートが特徴的。[ヘッドドレス](#)や[ボンネット](#)など、他のファッションでは見られない小物を使用する。主に連想される色は、少女趣味を強調させるピンクや白。他にも赤や水色、黒などがある。基本的には優しい色合いや明るく元気な色合いのものが好まれている。モチーフとしては苺やさくらんぼ、ハート、リボンなど、[姫系](#)など少し似たような服装で使用されるものが多い。スパンコールやストーンなどのキラキラしたものは、ロリィタブランド[アンジェリックプリティ](#)などが取り入れている以外あまり用いられず、パールやカメオ、ビーズレースなどあくあまで古典的な上質な雰囲気装飾が中心であり、チープなデザインのものとは殆ど見られない。

[フリル](#)は童話のお姫様や外国のお嬢様を連想させる、少女の憧れである。一般的、特に男性から見ると、唯の布に襷を寄せただけの装飾であるフリルも、ロリータの目指す可愛らしさ、少女らしさを表現する上では必要不可欠である。ただし、多様し過ぎるとデザインが単調になり、地味で大味な物になってしまう。ロリータファッションはディテールが細かく、造形師や[絵描き](#)に好まれやすい。苺やプードルなどのモチーフは、戦後の少女雑誌（それいゆなど）から「少女のもの」というイメージが広まったものがほとんど。ユリ紋章や薔薇、王冠など高貴さを象徴するモチーフもある。

ピンク、ホワイイトなどは少女に好まれる色の定番である。そのため、この色で装うと幼い雰囲気や少女趣味を前面に押し出すことが出来る。[サックス](#)は少女らしいというよりもボーイッシュにも感じられるが、少女向け玩具のパッケージやキャラクターによく使われるなど意外と人気がある。ロリータの感性が年頃の少女に近いのか、少女らしさを出すためにこれらの色を使用しているのかは不明であるが、その他に赤・[エンジ](#)や黒も好まれる。これらは大人も好む可愛らしさであり、子供っぽさだけに拘らない。特に黒×白の組み合わせは、初心者にも幅広く好まれるロリータらしい配色である。

あくまでクオリティが高いのが前提であり、あまりに安価な素材で作られると、[コスプレ](#)っぽさが前に出てしまいがちである。あくまでも上品さ、質の良さが求められている。

## ロリータの分類

[[部分編集](#)]

ロリータは細分化されており分類へのこだわりの強さが一般人には理解できないイメージがあるが、甘ロリや黒ロリなどの総称をゴスロリとするのは誤りで本来の総称は「ロリータ」であり、問題として指摘されるのは甘ロリをゴスロリと呼ぶなど伝達に障害が生じる間違いであり全て「ロリータ」で一括りにする分には何ら問題ない。

パステルカラーをベースに、レースいっぱい甘いデザインは[甘ロリ](#)。  
クラシカル色の強いものや、ロリィタをベースにしたクラシカル服を[クラシカルロリータ](#)。  
黒×黒や黒×白で全身統一したロリィタスタイル・ロリィタ服を[黒ロリ](#)。  
全身真っ白でコーデしたスタイルや、白のみのデザインが[白ロリ](#)。  
エンジやエビ赤など、赤系統の色を中心にコーデしたものが[赤ロリ](#)。  
少女よりも、お姫様のイメージが強いものを[姫ロリ](#)。  
ゴシック的な要素を多分に含んだものを、[ゴシックロリータ](#)と呼んでいる。  
これらは既に呼び方だけでなく、基本の知識や分類として定着している。  
それぞれの着こなしに適した服を、[服](#)（例：黒ロリ服）と呼ぶことも多い。  
詳細は青文字（リンク）をクリック。

## ロリータのルーツ

[[部分編集](#)]

ナゴム系（ナゴムギャル）だったという説が最多数。  
ナゴム系とは、1985年～1990年頃のバンドブームにナゴムレコードと言われるジャンルの追っかけをしていた女性から広がったファッションで、ツインテールやお団子など子供っぽい髪型をしたり、小学生でもないのにランドセルを背負うなどの特徴的なスタイルであり、「ナゴム系」であるかは不明だが、当時、王冠やトランプなどのロリィタ的なモチーフを多用したファッションの人々が街を歩いていたらしい。また少女的な特徴を多々持つ1980年代前半のオリブ少女をルーツに考える人もいるが、オリブ少女ブームとバンドブームは時期が微妙に重なっているため、好みのブランドも似ており、ナゴムギャルかつオリブ少女という者もいた様子はある。

また、[ピンクハウス](#)がロリィタの発祥であるとも言われているが、[ピンクハウス](#)はカントリーテイストが中心であり、ロリィタとは異なる。  
[ピンクハウス](#)はロリータの前進と言われているオリブ少女に人気のあったハイブランドだが、外国の田舎っぽいテイストと、お姫様・お嬢様のイメージはむしろ正反対である。  
しかし、どちらも少女趣味がベースであり、ピンクハウス系が、このようなファッションを後に伝えてきたとは考えられる。  
ロリィタはお人形の衣装、西洋の少女の服装、ヴィクトリアン時代のドレス、子供服、不思議の国のアリスなど、様々なイメージや要素が重なっているため、その中に「ピンクハウスなどのふりふり服」があっても違和感はない。  
ピンクハウスはロリィタブランドではないため、現役でロリィタを着る人が着ることはほとんど無いが、ピンクハウスから新しいロリィタにシフトする者もかつては存在した。

デザイン・発展のルーツやファッション業界的には上記のようなものであるが、ロリィタにしるゴスにしる、まずロリィタ（ゴス）という存在がまず先にあり、それから「これが私達のソースです」と言ってロココの美術様式や竹久夢二の絵などを「逆指名」する。  
そして、それを聞いた者の手によって、そのとおりにもっともらしく歴史が書き換えられていくため、歴史を「辿る」ことはまず出来ない。

ゴシック様式とゴシックファッションがどうしても繋がってくれないのも、その為である。そもそも、正確なソースが元々あるのかもしれないが、小さな子供や小鳥の雛を見て可愛いと思うといったような元々、誰にでもある普遍的な感覚が何かの理由によって、異端として扱われる立場になっているのがゴシックであるとか（その感覚は別に特別ではなく、別に幼少期に何があったとか何のカルチャーを好んでるとか関係が無い）、ゴスは全員同じように見えてそれぞれ全く違う文化を持っているとか、無意識の顕在化とかそういったモノの可能性も出てくる。似たような好みの集合体であり、そこに至るまでは人それぞれ違うというのが妥当なところであろう。

ソースに「西洋の服飾文化」を指定して着ることもあるというだけで、ロリィタは西洋のドレス「そのもの」ではなく、そして、それとゴシックの美術様式が組み合わさったものがゴスロリ的感覚でそれを引き継いだのが日本のゴスロリというわけではない。あくまでも愛好家が逆指名していった結果、そのような解釈に落ち着かざるをえなくなってしまうのである。

よく観察すれば、ロリィタも生粋の日本文化に入る。

また、ほとんどの「元祖は」というのも後付けの理由に過ぎない。

ロリィタ・ゴスロリの解釈は複雑過ぎるため、安易に決め付けるのは危険である。

[ページTOP](#)

## ロリータというひと

[部分編集]

本人達はこの服装について「特殊な服装」と考えている節はなく、他人にそう思われることをあまり快く思わない。

しかし、全ての人が初めからすぐに袖を通せるわけではなく、今まで着たことが無いような華美な服装を着用する事への抵抗や、これまで自分が認識してきた「自分」とのギャップを感じるケースも多いようだ。実際に自分がハマるまではこのジャンルの人間に偏見や抵抗を持っていたり、あるいはコスプレや特殊な恰好と認識していたという者も多い。

一般人からはロリィタを着る理由としてよく「変身願望」が挙げられるが、実際にそのような願望を抱きそれに成功した者も居れば、そういった考えを全く持たず、むしろ自然とそのような服装になっていたこれが自分らしい服装だと認識している人も居る。また、「大人になりたくないから着る」という解釈が一般論のみならず、ロリィタ文化の場でもよく議論されているが、

着始めた時期や生い立ちは各人によって様々な為、ほとんどの愛好者はその主張に異論を唱えている。こういった議論が嫌われているのはどうも1987年に一部のメディアが「かわいらしさに固執するのは成熟性の拒否か」と有識者のジェンダー議論の対象として、ロリータルック、少女ルックを取り上げたことが原因かと思われる。この議論はどうも1990年代後半まで続いたようだが、1990年代中頃になるとロリィタだけではなくマスコミや一般人にすらも飽きられ始め、苦言を言われている。2000年代になるとそういった議論は殆どみられなくなる。

他のファッションジャンルにはある程度狙った年代や生活レベルがある。以前はロリータファッションにもそういった定義付けがなされていた。しかしロリータファッションにはジャンルの発案者というものが特に無いため、実際の購買層は非常に幅広く、学生は勿論主婦や成人してからこのファッションを好む人も居る。

高齢や小学生（親に着せられている場合は幼児から）で好む人も居る程。

一般企業OL向けや大学生向けなど職業も特に限定されておらず、学生、フリーター、会社員、教師、公務員など様々。

現在一般的には少数派でオタク系が多いと思われがちなロリィタも、ファッション・ピープルの割合の中では結構な割合を占めている。

特に興味がある者は専門学校に通う等して、ファッションへの道を志す者が多い。

元来、ロリィタは人数が少ないためか個々の繋がりが薄く、

最近益々好みや嗜好、思想も細分化しておりどちらかというと孤立し易い。

同じロリィタ同士という理由で互いに認め合ったり、馴れ合うことを推奨する一般人（言い換えればロリィタの排他性への批判者）は多いが、同じロリィタに対抗心を持ったり敵対するロリィタの特徴にはそぐわず、ロリィタ界では他者と交わらないプライドの高さが尊重される傾向にある。排他性やプライドの高さゆえにこのファッションが洗練される、という考え方は、あまり語られないものの、実際にこのような考えが根柢に流れている。それでも、多少の繋がりには保たなければ情報も入ってこないため、ささやかなお茶会やイベントやライブ会場などで同好の仲間を見抜く。そのような場所では多くロリィタが集まるため、ロリィタは集団を好むと勘違いされ易いが、実際には逆で、集団を好まない為に他人と被らないロリィタやゴシックに落ちついた一匹狼的な性格を持つ者が多く、周りが始めたからという理由で着始めた者は別として、一様に集団心理には批判的である。

そのファッションに対して連想させるイメージとは異なった性格を持つ人も多く、（服装に対してというよりは殆どメディアによるステレオタイプの設定のせいもある）ブランド・メタモルフォーゼでは「パンキッシュ」な精神の元製作がされている。最近ではそういう嗜好の硬派な愛好者も少なくなっただけかもしれないが、単に可愛いだけでなく、少女らしさの中にパンクや毒があると強調する人は多い。眼帯や包帯、流血などの安直なモチーフで表現されることも多いが、実際にはもっと奥深い難解なものとして扱われている。「毒」の部分は「コケティッシュ」としても表現される。一般的に思われ易い「馬鹿っぽい」「子供っぽい」というイメージを嫌うロリィタは多いが、ファッションのテーマとして、そのようなイメージを設定する者もまた居る。ロリィタが少女のような振る舞いをするというのは偏見であり、ロリータファッションやそのブランドの提案する理想像とは異なる。

ただ一つははっきりと言えることは、ロリィタという個性があるのではなくロリィタの中に様々な個性があるのであり、ある程度の傾向はあれど、全て一纏めにするのは不可能であるという事である。

[ページTOP](#)

## ゴシックロリータとロリィタの関係

[\[部分編集\]](#)

ゴシックロリータとロリィタは一見すると正反対の要素を持っているが、正反対であるからこそ対になっている部分も多い。例えば、少女や童話など服に使われるモチーフは非常に被りやすい。その為、ゴスロリとロリィタファッションのファンが被っているのは、別段不思議なことではなく、全く別のジャンルとは言い切れない。一方で、吸血鬼やゴシックな蝶々モチーフ等のゴスロリ独自のモチーフや、ピンクを基調としたポニーや、お菓子等の甘ロリ独自のモチーフもあり、それぞれをのモチーフを好むかどうかという点で、お互いの理解度も違ってくる。

ゴシックとロリータとパンクの要素は一見結びつきにくいもののように捉えられがちだが、マリスミゼルのManalによれば「可愛らしさを持った少女の内面には魔的なものも潜んでおり、その両方を体現したのがゴスロリ」であり、彼の提唱するエレガントゴシックロリータは少女のダークサイドに重点を置いている。また、ゴシック文学には古城や館・吸血鬼などお姫様願望を満足させる要素が多く、ゴスの女性にはお姫様願望があり、お姫様願望のある女子にはゴス因子があるとみる向きもある。またゴシック文学の名作は10代後半～20代前半の若い作家が書いているものが多く、ゴシックの反社会的な内容はパンクからの受けが良い。映画「ひなぎく」は少女のパンキッシュな魅力を描いた映画であるし、「小さな悪の華」という映画には「少女・背徳・パンク・アナーキー」というテーマが描かれている。ゴシックやパンクだけでなく、コスプレやタトゥー、ヴィジュアル系にもロリータとの共通点を見出す人もいる。なのでこれらは元々好相性の筈であるが、これらすべてを一括りにしてしまうとどちらか一方のジャンルの力が強くなってしまい、混乱を招いたり、他のジャンルの特性や魅力を食い潰してしまう危険も十分ある。なので

本来はとても仲が良いのであるが、お互いの文化の良いところを破壊しないように距離を置いていても推察でき、「ゴスロリ」という言葉が嫌われているのもそれが原因であるとみなす人もいるようだ。

ゴシックロリータが台等した当初は、古参のロリィタからはあまり受け入れられなかったらしく、ロリィタはゴシックロリータに対する偏見を持っていたという事を示す古い記述も、いくつか見受けられる。しかし、現在ではロリィタファッションの一ジャンルとしか認識されていないため、普段甘ロリを着ることが多い女性が、たまにはゴスロリの服を着る事も普通の事であり、普段暗い色を着る事が多い人が明るい色を着る事と、感覚的にあまり差は無い。

ブランドにおいてゴシックロリータを出すブランドと、普通のロリータ服や甘ロリ傾向の強い服を出すブランドははっきりと分かれているが、(例：甘ロリ、ロリータ系は [BABYアンジェリックプリティ](#)等・ゴシックロリータ系は [モワティエヴィジブル?](#)等)ロリータを出すブランドが、たまにゴシックロリータ嗜好の強い服を出す事があったり、逆にゴシックロリータ傾向の強いブランドが、ロリータファッションに近いデザインの服を出す事がある。

イベント等において、ドレスコードがロリータファッションとされている場合、(雰囲気でもクラシカル限定や甘ロリ限定と解る物で無い限り)ドレスコードにはゴシックロリータスタイルも含まれている。その様に、基本的にゴシックロリータはロリィタの傘の下だと考えても問題ない。

[ページTOP](#)

## ロリィタと姫系の関係

[部分編集]

ロリィタの中でも[甘ロリ](#)などのロリィタファッションは、[姫系](#)の愛好者側からは[姫系](#)と同一視されることがよくある。両方とも「お姫様」をイメージソースとした服装が多く、フリル、レース、パールなどの姫系の三大要素とも言えるべきものがロリィタにも存在するためである。また、姫系のファッションの愛好者とロリィタファッションの愛好者は、被っている事もまあある。

姫系のグッズはロリィタに似合うものも多くあるため、互換性があると考えられている。(中には、両者のブランドの商品を混ぜて使うのを嫌がる人も多いが、あからさまに姫系だとは言いつけないもの、小物に関しては通常その限りではない)しかし、どう見てもロリィタ専用である小物が姫系のもものと扱われていたり、お姫様風の要素のないロリィタまでもが同じような扱いを受けていることもある。

姫系がまだ「ロマ系」、「可愛ゴー(かわごー)系」と呼ばれていた時代には、まだ流行服としての側面が強く、休日のみのロリィタの普段着や、日常のロリィタの緊急用の服として愛用されてはいた痕跡はあるものの、これらとロリィタは同じ「可愛い」というベクトルにありながらも「相反するもの」とみなされていた。しかし、姫系が流行を意識しなくなり始めた頃からは、お互いの趣味が元々共通していた事もあり、おまけに一般でも可愛い物が注目され始めて、彼受けや流行派の姫系も元々はロリィタ的な「可愛い」物を受用するようになった事から、一般ブランドも巻きこんで急激に混同が進み、ロリィタブランド側が姫系を意識した商品や企画を出したり、逆に姫系がロリィタと殆ど変わらない商品を出したり、一般ブランドが姫系とロリィタ両方に跨る商品を出したりと、これらの動きでロリィタと姫

系の境界は、完全に曖昧な物と認識されるようになった。  
それによって、これまでは流行やファッションに詳しい、年若い女性や姫系の愛好者の間でのみ関係があるとされていた姫系とロリィタの認識や混同が一般人にまで広がり、  
TV等では出演者が姫系スタイルで固めているのにも関わらず、ロリィタと呼ばれる事が多くなった。

違いとしては、ロリィタは少女性を意識しているが姫系はそうでない事（大人のラインを強調したデザインも多い）、  
フリル、レース等に加え、光沢のあるサテンや冬以外のファーも姫系の代表的な要素でありながら、ロリィタにはあまり見られない事、  
ハイブランドのバッグや、キルティング素材のバッグ等の姫系固有の小物、  
姫系にはまだまだリアルクローズを意識したものが多い、という事が挙げられる。  
この様ないくつかの違いから姫系とロリィタは無関係とは言い切れないが、  
姫系とロリィタは全く同じものではないと判断できる。  
ブランドは被って居ても、雰囲気や外見は詳しい者が見れば全く異なっていると見える。

一方、姫ギャルというジャンルの中では、2008年頃から元々のロリィタをルーツとした「ギャルなりのロリータファッション」を目指した服装が、  
「[ギャルロリ](#)」という名称で提唱されている。  
黒ロリ、甘ロリ、姫ロリなどジャンル分けも全てロリータファッションを真似ている他、  
中にはh.NAOTO BloodやFRILなどをベースにした本格的なゴスロリも登場する。  
ロリィタに対し、ギャル的なセンス（主にメイク）を加えたものであり、  
例えギャルでも色白を基本とするなど、本家のように制約が多い。  
ロリィタらしく見えることに趣を置いた制約が多く、ほとんどロリィタに近いが、  
デコロリの派手さともまた異なる華やかさがあるのが特徴。  
しかし、本家からは「今まで馬鹿にしていた物なのに流行れば飛びつくのだろうか？」  
「また、そのうち飽きたら止めるのではないか？」などとその姿勢に反発の声も多く、  
流行として単に「消費される」だけではないのか等との懸念の声も大きい。

もともとギャルとロリータは相反する存在とみられていた為、以前からギャルを敵対視していた者もあり、ギャルのイメージとロリータのイメージが（ゴシックやパンク以上に）合わないの  
で、なかなか解り辛いところもある。受け入れられるためにはギャル全体にある偏見（「すぐにひやかしてくる」など）を改善しなければならないため、上品さやギャルメイクであってもあまり派手ではないメイク・ファッションにするなど受け入れ易い？要素をプラスしていかなければならないかと思われる。

[ページTOP](#)

## ロリィタとメイド・コスプレの悩み

[[部分編集](#)]

ロリィタ服の中のデザインに「メイド風」というのはごくわずかだが存在している。  
ただし「ファッションデザインとしてのモチーフの取り入れ」がされており、  
実在のメイドやよく見かけるメイド風衣装とは大きくかけ離れているため、  
一般人のロリータ愛好者が着ることも多く、それを着ている「だけ」では着ている本人がメイド好きとは限らず、オタク寄り（[オタロリ](#)）とも言えない。  
だが、オタク趣味やコスプレと混同される事を嫌い、徹底してメイド風のロリィタ服を避ける者も珍しくは無い。  
同様に、ロリィタの間では定番的な人気のあるアリス風のエプロンドレスも「可愛いと思うけど、メイドに間違えられそうだしどうしよう？」という理由で拒まれる事がある。  
これは、単に本人の持つオタク文化へのマイナスイメージに起因している場合もあるが、そうでなくてもロリィタに対する定義を崩さない姿勢の現れで、その様な行動に至り易い。  
そもそも、ロリィタの定義自体が各々によって異なる曖昧なものであるため、非常に稀ではあるが中にはメイドもコスプレもロリィタに含めてOKという懐の広いロリィタ愛好家も居る。

どちらも洋裁と関わりが深いカルチャーである為ロリィタとコスプレイヤー両方の立場を持つ者もあり、それがコスプレと奇抜なファッションの線引きに惑う事が多い一般側に更なる混乱を招いているという指摘もある。実態としてはコスプレ趣味を持っているロリータであっても、大抵はコスプレとロリータを混同されることを良しとしない者が、このロリィタ業界では大多数を占めている。ロリィタとしての拘りという以前に、両文化間にこれといった因果関係や歴史上の交わりが無い為でもある。逆にコスプレ側もロリィタの立場を慮り、「イベントでロリィタ風の(著作権ではない)キャラのコスプレをするのはロリィタの偏見を助長するので迷惑ではないだろうか」といった悩みを抱える者も居る。コミックマーケットや同人誌即売会などの屋内にコスプレブースを設けるイベントでは撮影時のトラブル防止用に番号札を身に付けることを義務化していたりするところもありそれを見れば容易にどれがコスプレでありどれがそうでないかを判断できるのだが秋葉原などの屋外で行われる場合は事情が別である。

秋葉原以外にも野外のコスプレスポットはあるため、特に「ファッションとして着ているロリータ」と「コスプレとして着ているロリータ」が混在している場所になると、余計に上記の様な問題が起こり易い。コスプレ目的用に製造販売されているロリィタ服(所謂仮装服)での外出は、一般人の混乱を更に招く為ロリィタ服だと思って買った等ではなく意図的に行なっていた場合はロリィタやコスプレイヤーから敵対視されやすい。

[ページTOP](#)

## 一般人とロリィタの確執

[[部分編集](#)]

前述したようにロリィタなどの少数派は常に誤解されやすく、酷い場合にはレッテルを貼られる場合もある。一般人であるという立場を主張しロリィタを批判・攻撃の対象にする者は少なくない。しかし冷静に見てみるとロリィタを批判する側には意外と変わった趣味を持っていたり、過激な主張をしている者もネット上では多々見られる。本人が一般人だと思っていても批判している時点で既に関心があるというのが事実なので、ロリィタを批判しておらず本当に感心のない人からみれば、一般人と主張している側も変な人に映る場合もあるのであまり気にしないほうがよい。バッシングを好む人間は間違いなく性格の悪い人なので、どうしても許せない人はネットで批判するよりもリアルで遭遇できる機会?を信じて待った方が無難である。

またロリータ同士の間でトラブルが起こる危険もある。中には、ある種の自信を持って「自分たちの考えている事が常識」と考えている節のある、愛好家が暴走して自分の考えを人に押し付ける事もある。個人的にするのならばまあ勝手にどうぞとも思われるが、(実は意外と“気合を入れすぎた”初心者にありがちなケースである)ロリィタ業界にいればすぐにわかるような知識不足や思い込みを押し付けてくることもあるため、本当に正統派のロリィタなのか?と思う人も中にはいる。その対象が「ロリィタとはこうあるべき」という形で、対象を変え他のロリィタ愛好家に降りかかる事も珍しくなく、また、余りに押しつけがましい原理的な発言は余計にロリィタに対するバッシングを招く(のではないか)という理由で、他のロリィタ愛好家からも一線を引かれる傾向がある。実際に彼女等の存在はバッシングを好む人種の格好の材料(面白半分?)としても使われている。

ロリィタ側にしてみれば不名誉な「間違った見方」は常に悩みの種であるが、その間違った見方は一般論では常識として堂々とまかり通っている。

原因はロリィタにもコスプレにも知識や興味を持たない(と主張している)「向こう側」が「当事者(ロリィタ)がそう思っているだけで実際には違う」という意見を持ち、「一般的でない人々の意見」は正当性が無いので耳を貸すべきでない、という判断を下す事にある。

それは人間は本質的に「自分の意見が最も正しい」と思うからであり、国民性の違いはあれど「多い方の意見の方が」が正しいと考えられがちだが、完全に自分が正しいと考えている人間は非常に少なく、心のどこかで「自分の考えは間違っているのではないか」と不安に感じているものであり、その為当事者に直に説得されない限り、その考えが改められるのは難しい。

(「直に」というのはポイントであり、自分の耳で聞いた事なら信じるという者は意外にも多い。なので、直接的な他者との関わりをあまり持たない人でもコミュニケーションに参加できるインターネット上の方が、上記の誤解が氾濫している。)

「世間一般ではそうだから」といった自らの尺度によってのみ判断しているのにも関わらず、第三者に責任を委ねた意見が対立する側に対してもまかり通るかと言うと、成功例は極めて少ないのが実情である。この様な意見は、相手からしてみれば「偏見」として捉えられてしまうのが常であり、あまり役には立たないことが多い。

客観的という言葉は、一般人とロリィタ両方の意見を含めてこそ通用する言葉であり、相手の意見を「ロリィタの主観」と判断し退ける行為は、そもそも客観的という言葉から大きく逸れている。

なお、顔や所属を明らかにせずコミュニケーションをとる事が出来る大型掲示板などにおいては、

「過激な主張のロリィタ」やそれ以外のロリィタを“演じる”「完全な一般人」もおり、面白半分や相手の主張を受け入れられないあまり、ロリィタの側からの稚拙な批判を演出し、自分達の信用性を高めようとするなどのテクニックを使用する者も中には居り、より衝突を複雑化しています。

そういった人間が技術のある者であった場合、個人を特定し相手の発言などを調べ上げて、相手の利用するHPやブログで嫌がらせをしたりする「ネットストーカー」と化する者もいる。これはロリィタ業界だけではなく、ネット社会ではわりと普通に行われているため、この様な大きなトラブルを避けるためには、初めから意見の通用しない(単に相手を貶めたいだけの相手など)

者には何を言われようとも相手にしないのが、最も有効であり大切である。

こういった人間はそもそも何をやっても、「何もしない」ということですらも効果がない。ネットを遮断するという方法もあるが、それをやったら数ヵ月後に再見したさいに、大量に悪口が書き込まれていたということも。

ネット上の悪口を消して欲しいと頼んでも全く応じなかった場合、相手に深い憎悪を与えることになり、佐世保小6女児同級生殺害事件では、被害者がネット上の悪口を消さなかったため、加害者の怒りを買ったケースもあります。

なのでネットに書かれてある悪口は相手を苛つかせる要因になるので、相手の神経を逆撫でしたり個人を特定できるような発言をしないのは最早基本中の基本であり、ネットであってもあまり個人の悪口や個人の好きなものに対する悪口を書くことは避けたほうが良い。(もし自分の悪口が発端となって抗議メールが殺到したりしたのならばそれは当たり前なことなので、辛口批判や悪口は定番のネットマナー違反のためやめましょう。)

ネットでイライラしたのならリアルで悪口をいうべきであり、ネットでは勝手なことがいえるが、リアルな人間の方が無理解な発言や自分勝手なことが言えない為よっぽどまっとうなことを言う。ネットなどマスメディアを通じた悪口はリアルでは通用しないことのほうが多い。

また、嫌悪感というのは個人差があるため、相手側からしてみれば、ただ単に嫌いと言った(書き込んだ)

だけで別に他人にまでその感情を強制してる訳じゃなかったという場合もある。

好意から苦言を呈したつもりでも、相手からしてみれば軽蔑されていると感じられる事もある。

実生活ならば説明の機会もあるがネット上だとういう感情の濃淡を読み取ったり、説明することは困難である。

つまり、ネット上でこの様な話題に始終する事は必然的に争いを生む事になり、両者の溝を深める結果にしかない。

最低限の配慮と相手に弁明の機会を与える事が肝心である。(それでも相手側の敷居の狭さのせいであろうも無い場合もあるが、この場合、強引に諦めるよりほかない。)

またロリィタ業界にはロリィタ業界のマナーがあり、一般常識には一般常識のマナーがあり殆どの愛好家はその両方を取り入れた上で各々の基準でマナーの範疇に収まろうとする。

しかしマナーというのも個人差が激しくTPOに関しても安野モヨコ(漫画家)曰く『「ロリータファッションはかわいいけど、日本の風景に合わないから着ちゃダメ」

「禁止はされてないけど、大学に着ていっっちゃ駄目」、コスロリサークルの結成が許可されている大学(早稲田など)、ファッションや文化を研究する大学や、芸術系の大学であってもこういったことを主張する者もいる。』という者や、「休日や普段のファッションなんて自由でしょ」という者まで幅が広く、同じ行動をしていても見る側によって普通の行動に見える場合もマナー違反に映る場合もあり相手にとっては「正当な批判」としてロリィタをバッシングするケースも多い。「その格好で学食やスーパーに行くのはマナー違反だ」というそもそもロリィタを着る機会自体を認めないものもあるが、恐らくそれを主張する者にとっては華美で奇抜な服装を特殊でない場で着用したり人と違う服装をする事自体がそもそも認めがたいマナー違反行為なのでは無いかと思われる。これらの主張は結局どれもマナーというものは殆ど公平性ではなく、個人の主観で作られているものだと言う事を浮き彫りにするだけであり、マナーを抛り所にした批判や苦言、それに対する反抗は無意味である。

また、何を持って原理的とするかも受け手により大きく異なる。

例えば、「様をつけるロリータは原理的だ」「メイドとロリータを区別しろというロリータは原理主義者だ」という人がいる。

しかし、前者はともかく、後者の意見を主張する人間はロリータカルチャーでは大半の人間が占めている。

「コスプレと思われても仕方ない、その上で好きだから着る」という姿勢を持つロリータも少数ながらいるにはいるが、

実際ロリータで外出するとその手の罵詈雑言は日常茶飯事であるため、「コスプレと思われても仕方ない」と考えている

ロリータであっても、内心ではロリータをコスプレと扱う人間を疎んじている場合が非常に多い。

また、ロリータ側からしてみれば「ロリータを着て外出するな」などの発言も十分原理的であり過激に映る。なので何が原理的かを考えるさいにはそれなり知識を蓄えてから状況をよくみて発言した方がよい。

これらの争いは結局の所、「一般人派」と「ロリィタ派」の価値観の押し付け合いに過ぎない。しかしロリィタが自ら正しい情報を発信し、個人個人がマナー違反などの行動で好感度を下げない

事を心掛け、今後もロリィタの存在が社会的に認知されていけば時間の経過とともにこういった衝突は減るのではないかと考えられる。実際にその様に考え行動に移すロリィタ愛好家も多い。

ロリィタに関してなにか人間関係でトラブルがあった者ならばともかく、殆どの場合は「自分の論を否定されたことが許せない」という単純な理由から批判に走る。特に知識の量等で圧倒的に不利な一般人側は、それを埋めるため単なる差別発言に始終し易い。初めからお互いに情報があって、初めて認識が食い違うという事がそもそも無く、もし意見が対立しても、どちらも対等な対話が望める為、暴言などの手段に寄る事が無く争わずに正しい形で意見交換が出来るのである。

## ロリィタがよく好むもの一覧

[\[部分編集\]](#)

お菓子・お菓子モチーフ・不思議の国のアリス・紅茶・中世・可愛いもの・姫系  
東京ディズニーランド・ディズニーキャラクター・シック・クラシカルテイスト・  
ロココ調・V系音楽・クラシック音楽・お裁縫・お洋服全般・嶽本野ばら・リボン  
モチーフ・苺モチーフ・丈の長い靴下・ヴィクトリアンテイスト・メイド喫茶・日傘  
王冠(クラウン)モチーフ・ハローキティ・チャーミーキティ・ケアベア・人形・球体間接人  
形・スイマー(一般向け雑貨ブランド) など

[ページTOP](#)

次項[ゴスロリの解説](#)

辞書ページ[ロリータ](#)

ファッションの意味以外にも触れています。